ユートピアとしての女性[1)]
—表象関係を拒んで—

ダグマー・ライヒェルト
(丹羽弘一・佐藤真江 訳)

Dagmer, REICHERT,
Woman as utopia: Against relation of representation,
Gender, Place and Culture, 1, 1994, 91-102.

私は書くことによって経験する。「かつて一度も完全には存在せず、完全には不在でもなかった女性を、存在する場所を持たず、彼女自身を主体とすることのできない誰かとして…。それでもなお、私は、書くことによって、実のところは自分自身を男性としてきたといわれなければならない。おそらく私の方向感覚の喪失はここからくる。つまり私は実際に男性であるが、男性とは何であるかを知らず、それゆえ私が何であるかを知らない。それはたぶん、私が私自身の中から放った第三の何かであろう」。[2)]

要旨 本稿における議論は水、つまり特定のかたちを持たない、しかしながら生成しつつある何かというメタファーにもとづいている。彼女自身を表現することなしに彼女自身を記述することによって、著者は読者に彼女/彼自身を定める必要なしにそれを理解させようと試みる。そのためには「女性とは何か？（What IS a woman？）」という質問が提起されねばならない。そしてある（IS）の明確な実在は、ユートピアのそれにも似た逆説的な（非）存在にもなりうるのである。地理学における空間は何であるか（what IS）の空間である。女性はそのような枠組みの中に安住できたのであろうか？それとも彼女はユートピアの逆説的な空間に住まうのであろうか？ユートピアの地理学はどのようなものなのだろうか？女性の空間とは何であろうか？

3.アルキメデスの法則：水に浸された身体は、あふれた水の重さと等しい静浮力の影響を受ける。
4.さらなる特性：
4.1.水はかたちを持たない。いやむしろ水はすべてを包みこむ球体にかたちを変える。露はしずくをつくり、しずくはまとまって流れ、流れはぐるりとめぐる。
4.2.水はかたちをつくる。それらのかたちは、球体に変る傾向と重力などほかの力の均衡のなかに現れ、曲がりくねる流れ、波、またはじょうご型の渦となる。
渦。4.3.流れは表面で、ゆがんだ水の面で、おたがいにすべるように過ぎ去ってゆく。流れは水がほかのものに、あるいは異なった速さの水に触れたところで混成や強度を形成し、層をなした境は、たがいに移ろい凝縮する力の均衡のなかで、最もわずかな
変化に反応し、流れは固さなしに
抵抗を形成し、衝撃は絶え間ない
波をかたちづくる川の波の
動きとともに続き、流れは
水によって射ぬかれ
水平そして垂直な流れは
ぶつかり、うねり
閉じた塊をかたちづくり
独特のリズムで鼓動し
渦の動きは次第に広がりそして縮まり
異なった力をつりあわせ
それらを分解する…

バーゼル、1518年、3月15日。ロッテルダムに生まれエラスムスとよばれた、ある有名な学者が、古い友人の著書をひもとく。それはちょうど印刷屋から送られてきたばかりで、彼はいま読んでいることすべてに完全に同意しないながらも、手にしているものが重要な、おそらく歴史をつくる書物になりうるとさえ感じている。著者の名はトマス＝モア。書物の名は『ユートピア』（More (1989)）。

本当に歴史をつくるというこの書物の内なる強い欲望から、この種の書物のなかではじめてのものではなかったにもかかわらず、この書物は後の一連の著作すべてとあらゆる様式にまでその名をもたらした。つまりユートピアという名は、ギリシャ語の副詞 ou－非、そして名詞 topos－場所の組み合わせとしてトマス＝モアによって発明されたのである。

ユートピア、モアの非－場所は――プラトンのアトランティス[3]のように――旧世界の果てを超えた想像上の島である。しかしユートピア――ギリシャ語の eutopia を思っても――は、「幸せな場所」でもあり、その名はただちにより良い世界と理想社会の描写、例えばプラトンの『国家』のような理想的な独裁主義の支配する社会、フランシス＝ベーコン（『新たなアトランティス』、Bacon(1982))が描いた科学的に組織された社会、もしくはH.G.ウエルズの想像（Wells(1987)）[4]やウイリアム＝モリスの『どこにもない場所からの知らせ』（Morris(1962)）にあるような個人的責任にもとづく社会を連想させる。しかし私が「ユートピアとしての女性」のなかで書こうとしているのはこれらのユートピアではないし、またシャルロット＝パーキンズ＝ギルマンによる『彼女の国』（Gillman(1979)）のような古典的なフェミニストのユートピアを説明しようとするのでもない。ジェンダー関係のような現代社会の関心事がユートピアの社会において解決される多様なあり方、そして女性作家のユートピアについても多くの著述がある[5]。それは驚くべきことではない。なぜならその社会の自像を理解するには、ユートピアを研究するより良い方法がないからである。非－場所の描写のなかに、彼/女らは彼/女らの文化における最も基本的な問題を映し出すのみならず、彼/女にとって最もあたりまえの世界をも示す[6]。それにもかかわらず私はユートピアにおける女性、あるいはユートピアの作者についてではなく、ユートピアとしての女性について書こうとしている。重なりひとつである「ユートピアとしての女性」は、僭越な一般化を意図したものではないし、統一を試みるものでもない。私がここで関心を持っているのはある特定の女性やユートピアではなく、女性とユートピアそれ自体の理念である。理念とその地理学。

歴史的に様々なユートピアを比較することは、地理学的思考にとって魅惑的なことであろう。「ユートピアの地理学」は非－場所の場所における置き換えを明らかにできるし、それらがどのように世界のすがたの変りゆく理念、世界についての前衛的研究に関連しているかを示す。例えば 17 世紀と 18 世紀のユートピアは、新世界の発見によってかなり影響された。しかし 18 世紀の後半には（クックはすでにオーストラリア東海岸を発見していた）、世界にはもう非－場所のための余地は残っていず、ユートピアは時間の次元に移された[7]。このように理想社会は多かれ少なかれ、進歩の軸上にある到達可能な目的[8]として位置づけられた。われわれの世紀にはしかしながら、ユートピアは、さらに別の次元に超えてしまったように思われる。つまり私たちがすでに依拠している次元、しかしながらいまだ名づけたり、非なるもの、つまり空間ではなく超空間、時間ではなく同時性以外のなにかによっては示すことのできない次元にである。おそらくこの次元は私たちが普通に経験する、全世界の場所を取り囲む空間と時間の軸－東京の株式市場や第三世界のメトロポリス―と交差する点で予示される。科学技術の発達や記号と物の取り引きの増大は、今日における非－場所のための空き地を含んだこの新しい次元を広げてきたように思われる。それは場所を失ってしまった、歴史の終局への過ぎし日の努力が、新たな方向を見だしうる次元でもある。

しかしユートピアの地理学がとりわけ私の興味を引くのは別の理由がある。その理由は、ユートピアの地理学が関わる空間が逆説の空間だということである。この逆説とは正しく演譯されるにもかかわらず矛盾しているがゆえに、理論的には存在しえない一つの位置である。しかしこの位置は理論的には除外されているけれども、例えばユートピアにおいては依然として存在する。ユートピアが逆説であることにはいくつかの理由がある。その一つは架空の社会についての他のテクストとちがい、ユートピアは描かれている社会がすでにどこかに存在していることを前提とする。どこでもないどこか。アトランティス、ベンサレム、エレホン、太陽の国、そしてイカリエンのような場所を地図に描くことがとても難しいのは、この逆説的な位置のためである。

何かを地図に描くためには、それがある場所になければならない。場所は秩序ある空間、地理学的、社会的、そのほかなんらかの種類の空間における一つの位置である。そこを支配するのは固体性の厳格な秩序であり、固体の厳格な秩序である。その基本的法則は、

§A = A(同一性の公理)

位置しているものははっきりと同定されなければならない。この公理が意味することは、位置する過程の間、またこの過程によってもそれは変化してはならないということである[9]。これに加えて、位置するすべてのものは、少なくとも他の一つのものと共通するものさしによって計測できなくてはならない

§A≠−A (矛盾禁止の公理)

空いている空間はあるかもしれないが、空間における同じ位置に二つのものが存在することはできない。

§A=A ∪ A=B (第三者除外の公理)

位置するものは明白で均質的な特質を持っていなければならない。それは明らかでしっかりとした境界を持ち[10]、すなわち明瞭に定められなければならない。したがってそれは他の何かと混合されないし、一つの場所に二つの異なるものがあることもない。占有された位置には曖昧な領域があってはならない。秩序ある空間におけるそれぞれの位置について、そこが何かの場所であるか否かを正確に決定することができなければならない。

論理学の公理は地図に描くこと、地図作成の基本法則である。これらの公理に反するものは何であっても、空間のなかに、地理学的空間、社会空間、なんらかの他の秩序のなかに場所を得ることはできない。

おそらく驚くべきことには、さらなる解釈は可能的な空間さえユートピアにふさわしくないことを示す。ユートピアはそうであるにはあまりにも逆説的である。それぞれのユートピアには、例えばすべての欲望がかなえられたときでさえ、まだ何か満たされないものがあるといった本質的な矛盾があるのだ。理想社会が達成されたときには、それ以上変化が探し求められることはなく、旅は終わる。変化は意味のない概念になる。それなのにユートピア社会の住民は、まだ何かに向かって努力し、変化を望みそして恐れ、創造する。

このようにもしユートピアの理念が、可能となるにはあまりに逆説的であるならば、ユートピアを書こうとすることは逆説以外の何ものでもありえない。つまりそれは強く執着しないことによってのみ、到達を望むことができる理想社会を建設することなのである。ユートピア的な社会改革を可能性とするには、ユートピアの思想は絶え間ない再定義に開かれていなければならない。社会改革は計画にそって、また堅固な秩序機構のもとにおこなわれるものではない。ソビエト共産主義の崩壊[11]と社会工学のすてきな目的の悲劇的結果は、この本質的な矛盾を無視した成り行きを示している。

...縮細皺のようなさざ波が水面に広がるほかは、水と空の区別はつかなかった。空が白むにつれ、水と空を劃す一線がしだいに色濃くなると、灰色の海には幾筋もの大波が湧き起こり、次から次へ、追いかけ追いかけ、耐えることなくうねり寄せ...

ユートピアは位置づけられない。ユートピアは位相—論理学にとってはあまりにうつろいやすい[12]。それにもかかわらずユートピアは存在し、機能する。ユートピアはその定義と位置づけを超えた事実性を持っている[13]。またその事実性はわれわれの活動に方向と意味を与える。ユートピアは根拠地といってもよいであろう。しかし場所を欠いた根拠地、本当の非−場所。つまり「場所」と同じように非−場所、どちらでもあってどちらでもない。そしてこのことが、なぜ私が「女性のユートピア」について語れるかということ。

女性にとっても、ユートピア。

女性の非−場所を語りながら、私は女性のためのさらなる空間、自分の部屋に対する彼女の権利を求めているのではなく、社会における彼女の場所への認識を要求しているのでもない。これらの変化は必要であるが、場所を定めた結果に少しでも直面してみよ。このような要求はラディカルさに欠ける！このような要求は「ジェンダーの地勢図」を描くのに、西洋の伝統が女性を文化の外に、自然の中に、荒れ野の中に位置づけることを示すのには物足りない。アンティゴネーがクレオンの都市において理解されていなかったとすれば、それは彼女の場所が都市の門外にあったからではなく[14]、彼女の言葉がまったく位置づけられえなかったからである。彼女の言葉がユートピアのそれだったからである。彼女が埃のなかの痕跡、見えない、永続する表象のしるしのほかには何も残さなかったことは

書かれないのか？アンティゴネーは表象の主体ではなく、彼女の言葉、女性の言葉は過去において主張されてこなかった。それを試みるものは、女性排除の地図を描くものはそれにもかかわらず、いまだわれわれの家父長制文化の、地図作成文化の、全ての「事物」が、女性の非―場所さえそれぞれの位置に置かれ、定められ、固定されねばならない文化的基盤のもとで作業をしている。他者が領域化され、名づけられ、規定されるのは、自身特有の視点からである[15]。そして他者を客体に転化し、たがいにその生気を失うのは、近代的主体であり、伝統的に男性である。主体との関係においてのみ客体は存在するために、彼女は彼の基準によって判断される他者なのである[16]。この関係においてのみ彼女は存在し現前する。彼女は彼によって表象される[17]。表象された他者の犠牲によってのみ、近代的主体は必死に探し求めている安全と自主性を得ることを望めるのである。このかたちでしか近代的主体は、そのアイデンティティを語ることはできない。

表象は人間の環境との関係と同じように、現在のジェンダー関係を支配している二元論的主体－客体の関係のすべてに特質を与える。あらゆるところで二つの特質が保たれている、

(1)アイデンティティは境界を定めることによって達成される。つまり自身ではないものが他者である。彼/女らはおたがいを除外し、常に距離を保って対比し続ける。この距離を横切ることは自己の死を意味する。男性は自然ではない。そして女性は？彼女の目に映った自像によって彼は彼自身を認識する。

(2) 二元論的主体－客体関係は非対称的である。自身は常に最初の一人、その肋骨から、その容貌から、その想像力から他者が彼女のアイデンティティを受け取ったとされる、それ以前からそこにいた彼である[18]。彼が主人で、てっぺんにいる者でなければならないのはこの理由のためである。表象の関係は彼/女ら自身の空間的秩序を持っている。

主体としての男性の自己理解が成長し、より拡大するにつれ、それが求めている確実性と自主性を得られないことがより明らかになってきた。男性のアイデンティティを育てる一方でそれを危険にさらす他者から、自然から、女性から、狂気から、…そしてユートピアから離れ、男性は空虚になってきた[19]。今日衰微とともに脅かされているのは主体のみではなく、客体であった者も、従順な奴隷の位置にもはや自らをとどめない。

私にとって主体－客体関係と、それらの関係を通じた男性の自己理解の批判は、今日さらに重要になっているように思われる。このような批判は環境破壊の根本的な理由、支配的なジェンダー関係、性と暴力におけるそれらの関係を指摘するであろう[20]。それらすべての基礎にもとづいてこのような批判は、行き過ぎてしまった地図作成の論理、空間における場所と固体の論理を明らかにするだろう。

近代的主体の位相―論理学のアイデンティティを批判するなかで、フェミニズムと人間生態学の関心が出会う。フランシスコ＝ヴァレラ（Varela(1975)）やハーバート＝スペンサー＝ブラウンが問い続けてきた生態学的問題（Spencer Brown(1969)）は、ジュリア＝クリステヴァやエヴァ＝マイヤーといったフェミニストの関心（Kristeva(1978)、Meyer(1983,1990)）に類似している。彼/女らはみな変化の可能性を開くために、近代的自己の理解を問うている。フェミニストにとっては、しかしながらこの問いは一つのさらなる問題を含んでいる。つまり伝統的に他者であり続けてきた女性は、彼女自身が他者を定める必要なしに、彼女自身が位相―論理学的な主体となる必要なしに、どのようにしてこの（彼の）表象における位置を離れることができるのであろうか？主体になることなしに、他の人々を他者として扱うことなしに、そして彼/女らに対して彼女の領域を定めることなしに、どのようにして社会とその制度のなかで発言力を得られるのであろうか？このゲームに参加することで満足することはあまりにも簡単で、一つの場所、空いた空間、わずかなページに満足することはあまりに穏和であろう。ここでの主張、位相―論理学的主体についての彼女の批判が問いただしているものは、今女性であることの困難さではあるが―少なくとも私にとっては―魅惑でもある。それは、ユートピアの張り綱の上でバランスをとろうとすること、場所の秩序と無の秩序の間を動くことを意味している。あきらめるべきほどには不可能なわけではない！

…ゆらめく鯖色のそれらのきらめきはかげり、それらは寄せ集まり、緑のくぼみは深々と黒ずんで、さまよう魚の群が横切ることも出来るかのようだった。それらは跳ね返っては退き、黒くふちどる…

ここまで私は簡単にユートピアとしての女性、非一場所を考えてきた。しかしなぜ彼女はそうであらねばならないのか？「ユートピアとしての女性」について語ることは僭越ではないのだろうか？

私は彼女が関係として表象された客体以上のものであることを確信しているがゆえに、彼女が支配的な主体以上のものになることを望むゆえに、女性が非ー場所であることを主張する[21]。この仮定において私は私自身から出発する。大多数の女性の存在が他者という外部に起源している一方、自主的な主体の境界は内部に起源し、他の可能性は後者にしか見いだせないことを私はまず知っていた。支配的な主体の境界を変え、乗り越えるためには、二つの経験が一緒にならなければならないと今私は考える。一見不足に、現実の市場における財の欠如に[22]、強固なアイデンティティを放棄し、場所から場所へとそれを移ろわせる人間としての「欠陥」と思われたものが、永久に遊牧民のままの、おそらくはさすらい人で、領域的秩序に従わず、しかしかたちない混沌に迷うこともない女性が「豊かさ」を生み出すのである。女性であることを欠如と考えることはなんという間違いだろうか！

近代的主体の自己概念を破壊することは、女性にとってと同様男性にとっても意味のあることである。ではなぜ変わるべきなのは女性でなければならないのだろうか。答えは明確である。女性、なぜなら彼女は死を恐れない！女性ゆえに、主体にその出自を求める必要もなく、すでに過去との関係を持っている[23]。なぜなら彼女は喜びを、楽しみを知っているし、非凡なる欲望を意識しないからである。

でも恐れることはない！私は新しいスーパーウーマンを提案しているのではない！このような主張の意味は、幼児の自我発達に関するある理論を背景として考察すればより明確になるだろう。それらを簡単に説明する。

幼児の自己感覚の発達に関するこれらの理論は、一方ではフロイトの精神分析的業績（Freud(1976)）と、一方ではソシュールの言語に関する構造主義的理論にもとづいている。これらは特にメラニー＝クラインとジャック＝ラカン（Lacan(1986,1987)）、後には程度の差はあれ彼/女の業績に依拠する均質的な学派、英国の対象関係学派の代表者たち[24]とフランスのポストラカン学派によって結合され、批判された。

これらの理論によると、自我は以下のように発達する[25]。自我は矛盾の内に生まれ出る。乳児は不快な刺激によって自分の身体を感じる。一方快感は不快感からの解放によって達せられる。乳児の身体はまだ自分自身を把握せず、周りの環境、乳児の身体がそこから快感を受ける母親の身体と一体化して一また分離して一いる。そこには定まった境界はない。このように誰かのための何かではなく誰でもないために、それを名づけることや定めることは難しい。クリステヴァ（Kristeva(1978)）はそれを「コーラ Chora」とよび、どのようにそれが律動的なエネルギーによって流れ出し、どのようにおたがいが強度を移しあいながら、（生物学的と社会一歴史的）強制力によって置き換わり、凝縮しながら滑るようにおたがいが触れ合っているかを記述した[26]。鏡面段階とよばれる六ー十八ヵ月の間、幼児の成長は質的な変化をとげる。つまり幼児は他者の中で自己を認識するのである。外側にある世界の反応に促進されて、幼児は自分自身を身体の輪郭によって限られた、継続的で一貫したアイデンティティを持つ、分離した存在として考えるようになる。この身体を動かすことができないにせよ、子供はそれとともに「私」を同定し、そうすることによって過去から、継続的でない、一貫していない、限られていないコーラから、そして流れゆく母への関係から自分自身を切り離す。オイディプス段階とよばれる発達のその後の段階で、分離の過程は完成する。今や子供は自らを養育し、以前にはまだ子供の満足の体現であった人とのきずなをさらに弱める。この段階における自我発達と、男性と女性の性的アイデンティティの分化は一体である。小さな子供を養育する人の大多数が女性であるわれわれのような文化においては、男性と女性の自我が異なり始めるなかで、この点が問題なのである[27]。性的アイデンティティ発達のために、少女は少年のように養育者、女性からそれほど距離を置く必要はない。男性の性的アイデンティティ発達は、母（養育者）からの明確な分離を求め、それは前ーオイディプス段階のコーラを強く否定することでもある。男性の「私」はこの分離によって自分自身を定め、それゆえに性器による快感の経験に集中する。われわれの文化においてこのような自己概念は、女性の「私」の発達には必要ない

子供の会話能力の発現はこの過程と密接に関係している。子供が自分自身を指示することを習う「私」という言葉によって、子供は言葉によって自分自身を考

えはじめるが、「私」はそれ自身のみを指し示す言葉ゆえに、そこにはある程度の見逃しがある。それは過去を見逃し、分離以前の過去にあったもの、つまり律動的に鼓動し、空間的に定められえないコーラを見逃す。自らを表現する欲望――そしてすべての欲望――はこの分離の中止と解消をめざしている。

この記述は概略にすぎない。これはどのように自我発達が言語、記号、および意味するものと意味されるものとの関係といった、記号論的概念を用いて説明されうるかを詳細に述べるものではない。またこれは分離の前オイディプスおよびオイディプス過程に関する説明における、多様な学派の代表者の間に存在する違いに言及するものでもない[28]。しかし近代的主体の現在における構築を破壊するのは女性であろうという主張が、なぜなされうるのかを説明するには十分であろう。つまり女性はコーラに近くあり、それゆえ強固な主権的な「私」に、それがそれ自身を分離した律動的な流れを思い出させるからである。また彼女は他者の鏡のなかでそれ自身を認識することを学んだ主体に、自らがが自ら自身を理解していないことを、そしてそれが表象するこわれていないアイデンティティのなかには――たとえそのような希望を主張せねばならないにせよ――、その起源を見いだすことは、決して望むことができないことを思い出させるからである。女性は、近代的主体にもう一つの過去、矛盾からの発現を思い出させ、主体が完全で純粋なそれ自体の理念を保つことができず、しかしそのかわりに主体自体すべての現実の不完全さに負っていることを認識せねばならないことを論証することができる[29]。

もしそれゆえ女性が喜び、楽しみを知り、非凡なる欲望を意識しないのならば、それはこのような理由によるのである。彼女自身をコーラ、母親との関係から完全には切り放さない彼女は、アイデンティティではなく、自身でもない――彼女はそれ自体で十分な楽しみを経験でき[30]、そして位置づけられえない。それは彼女がそれを感じるという事実以外には何も知らない楽しみなのである[31]。

もしある者が女性は死を恐れないと主張するなら、それもこの理由によるのである。つまり他者のなかでの自己―アイデンティティの喪失に、彼女を脅かすことはできないし、過去の知識に住まう彼女は彼女と自己との間の破面を思い出す。彼女は失うような固さをもたない。

このように過去との関係のなかに住まう女性は主体ではないが、しかし客体、ただの他者でもない。彼女は不在ではないが不在性であり、「あらゆるアイデンティティの囲みの中の外的存在」[32]であり、位相―論理学よりも広義の論理学にしたがって行動する。彼女の個性は位置づけられうるような閉ざされたかたちではないし、かたちのない混沌でもないが、――強度によって流れめぐる――常に形成の、関係性のなかからかたちづくられる過程にある。彼女は場所ではないし無でもないが、しかしむしろ非－場所、ユートピアなのである。

しかし。

…それらは砕け、みるまに浜辺に水を打ちひろげた。それらは次々と寄り集まっては砕け、それらの砕け落ちる勢いで、飛沫がはねかえった。それらは濃紺に染まり、背に映えるダイアモンド型の光の模様のみは、動くにつれて小さく波打つ馬の背の筋肉のように、さざ波立っていた。それらは砕け、退いてはまた砕けた。大きな獣が足を踏みならすような音をたてて…

しかし。それが女性か？そのように女性はなるべきか？女性はそのようになるべきなのか？これはユートピアというよりも夢ではないのか？これはさらに女性を新たな理想へ縛りつけ、彼女を再び配置する別の試みではないのか？彼女を今「非－場所」、「巨大な蝶のような白い帆を張り、暗い海を渡る船」とみなすことではないのか？ふたたび女性を、「騒ぎの真ん中に、陰謀と計画の破壊者の真ん中にいる男性の横をすべるように過ぎ去り、彼がその幸せと退職を熱望し」――いまや男性のみならず自ら檻に閉じこもっている近代的主体一般にとっても「おだやかでうっとりさせる生きもの」[33]とみなすことではないのか？

この批判はしばしばあるが、間違いである。そう、間違い。彼女を「ユートピア」、そして「非－場所」とよぶことによって、私は単に今ふたたび女性を定義し位置づけているのではない。これは重要なことであり、この主張には二つの理由がある。

第一にこのテキストは何かについてのものではないが、しかしこれ自体が何かなのである。もしこのテキストが少しでも何かについてのものでなければならないならば、これはせいぜいただの同語反復についての

ものにすぎない[34]。もし女性がユートピアであるということが正しいならば、私は「ユートピアはユートピアである」とか、「コーラと密接な関係にあるのは女性であるから、女性はコーラと密接な関係にある」といったことを述べてきたにすぎない。女性は女性である。（そして薔薇ではない。）

同語反復は世界について何も語らない。それらは何も表現しない。そして私は表現しないようによく気をつけよう！確かに落ち着きもなく、社会的因習における暗黙の了解を当てにして、まばたきしながら「そう、私たちはみんな女性だということを知っているのよ、そうでしょ？」しかしそれは別として、私がその人について語ることのできる人はいない。これが第二の理由、つまり私は私がしてきたやり方で女性やユートピアとして誰の特徴も述べることはができない。なぜならそうすれば私はとたんに矛盾してしまう。もし女性であることが非－場所にいることを意味するのならば、私は特定の人をそこに置くためにこの非－場所を据えることはできない。非—場所はそれができるほどに強固ではない。また私は「女性」ということばを、私が考えた女性のあるべき場所、非－場所に結びつけることもできない。据えるべき場所はなく、結びつけるべき人はいない。表象を越えた時間。

しかしもしもあなたが望むなら、これをあなた自身のものとして受け入れ、ともにゆくこともできる。かつてリュス＝イリガライが述べたように、論点は「誰の主体や客体が女性であるべきかといった新しい理論を展開すべきことではなく、むしろ理論的機械を停止し、あまりに明白な真実とあまりに明白な意味を主張することを見合わせるべきこと」[35]なのである。それゆえ私は同語反復に固執し、自分自身を書くことのほかにはなにもしないと主張する。私は女性としてこれを書き、もし女性がユートピアであるならば、彼女を記述することはできないが、読みそして書くことのうちにユートピアになろうとすることはできる。これが私のユートピア、女性のユートピア。

…それらは彼方向こうの水溜まりまではもはや及ばず、不揃いに浜辺に残された黒い点線にも届かなかった。砂浜は真珠のように白く、滑らかで、輝いていた…

訳者解題

本稿は Reichert, Dagmar (1994): Woman as Utopia: Against relations of representation, Gender, Place and Culture, vol. 1, No. 1, pp. 91-102. の翻訳である。ライヒェルトの書き物をさらに読もうとする読み手の手助けになっても、この「解題」は本稿の説明にはまったくならないことを考慮していただきたい。なぜなら彼女が本稿の最後に主張しているように、「このテキストは何かについてのものではないが、しかしこれ自体が何かなのである」。つまり、本稿は、それをどの学問分野に帰属させるのか、筆者自身をどういうものとして定めるのかといった、同一化の行為そのものに、そしてそれを生み出した近代的様式の諸相に挑む書き物だからである。

われわれの住む世界は、ますます良くないものになりつつあるように思われる。われわれの場所はより大きな不幸に見舞われつつある。しかしオータナティブを描く想像力もまたわれわれはもたない。一見混乱ともとれるここ数年の場所をめぐる言説の過剰さは、まさにこのような状況の現われであろう。どこにも行くところはなく、しかしながらこれらのディスコースを通して、どこでもない場所は、次第にぶつかり、うねる流れのようにかたちづくられてきているのではなかろうか。まさにこの非—場所、ユートピアはライヒェルトら女性地理学者をはじめとした言説の中で、われわれの空間と知の形態に意味—方向を与えつつあるのである。

従来多くのフェミニストたちは、男女の性的役割分担を社会的に決定されたものとし、男性は中心、抑圧者、主体、公的なもの、女性は周縁、被害者、客体、私的なものという二項対立的図式を掲げたために、女性自身のなかの差異を隠蔽してきた。また女性の性を生物学的決定論的な主張を経て、独立したもの、あるいは自立したものと考えた場合には、ふたたび女性を領域化し、固定し、抑圧する結果を招くことになった。さらに女性のなかに男性によって抑圧されていた「男性性」を見い出そうとしても、最終的には女性のなかの差異を消してしまうこととなった。

ライヒェルトの書き物は、こうした二項対立的な、いわゆる近代的発想から議論を開始しない。ジュリア＝クリステヴァ、エヴァ＝マイヤー、リュス＝イリガライにはじまるフランスの差異派フェミニストたちの影響を受けたと思われる筆者は、対立項とは対決しない。かわりにそれらを基礎づけている支配イデオロギーのディスコースを使用しながら、その支配イデオロギーを内側から空洞化させていくために、彼女は女性の肉体を肯定的に再定義し、男女の差異を認識し、女によって構築された女の書き物の存在を強調する。女性は彼女の母親との関係から完全に切り放されず、すでに過去との関係にたっているがために、彼女は近代的主体でもなく、客体でもなく、他者でもない。彼女は常に流れめぐる関係性のなかで形成されるユートピアとして存在する。ユートピアは失う固さをもう持っていず、境界づけられず、固定されない。

あのいまわしい近代的発想（！）にもとづいた何かと何かを一致させる作業－アイデンティティ—はもう必要ではない。同時にそれは近代の既存の「言語」の解体を試みることでもある。つまり彼女の書き物－女の書き物－は、革新的な「言語」の語りの場としての「詩」なのである。

原注

1)この論稿は 1991 年の秋に書かれ、バーゼルにおける 1991 年度ドイツ地理学会大会で発表された。転載を許していただいた Accedo / Munich 社に感謝をしたい。論文のそれぞれの節を分けるために用いられた四つの引用（「縮細皺のようなさざ波」から「滑らかで、輝いていた」まで）は、ヴァージニア＝ウルフの著作、『波』（Woolf(1931)）からのものである。（訳注：訳は川本静子訳(1976)『波』、みすず書房、3, 64, 137, 168 頁によった。）

2)1990 年 5 月 9 日付 Die Tapeszeitung 誌におけるエルフリーデ＝イェリネックへのインタビュー、「ヴァンパイアのような二重の生」（Jelinek(1990)）。

3)プラトン、（Plato(1959)）「クリティアス」、第 6 章、112 頁以下、およびプラトン（Plato(1959)）「ティマイオス」、第 3 章、25 頁以下。

4)彼のユートピアにおいて、人間は神と同等である。

5)『彼女の国』のほかにも他にまた、サリー＝ギアハート（『さまよえる国』（Gearhart(1982)）、ジョアンナ＝ラス（『女性的人間』（Russ(1985)）、そしてマージ＝ピアシー（『時の果ての女性』（Piercy(1979)）らフェミニストのユートピアもよく知られ、論じられるようになった。例えばフェミニストおよび古典的ユートピアの両方について書かれたヒラリー＝ローズの論文「未来を夢見て」（Rose(1988)）を参照されたい。またシャルロット＝パーキンズ＝ギルマンの『彼女の国』に言及した、ウラ＝ツォーラ—エルンストの批評、「ユートピアモデルにおける思考への敵意について」（Zöhrer-Ernst(1989)）も参照されたい。理想的な女性像の創造と、それらが持つ事実性の女性に対する影響は、クリスティーナ＝フォン＝ブラウンによる『過去の恥知らずな美』（Von Braun(1989)）における優れた文学分析の主題である。

6)例えばマイケル＝カリーによる『核戦争の後で—可能的世界と専門技術信仰』（Curry(1985)）を参照せよ。そこでは核による大量虐殺後の世界に関する現代のシナリオが、われわれの文化においてまったく当然と考えられているいくつかのことがらを示すために用いられている。これらは制度と行動の様式として理解することができ、－そのシナリオが示すように－そのような出来事の後であろうと、著者らは変化の困難さを認めている。

7)時間における非－場所に位置づけられた、いくつかの古典的ユートピアもある。それはしかしながら、黄金時代へ回帰する周期的時間の中にある場所である。コセレック（Kosseleck(1982)、1 頁）は直線的な時間軸への「飛込み」と時間的なユートピアの始まりを、ルイ—セバスチャン＝メルシェ（Luis-Sebastien Mercier）の小説、『2240 年』がフランスで発刊された 1770 年と定めた。

8)エルンスト＝ブロッホ（Ernst Bloch(1982)）、1 巻、第 18 章）を参照せよ。

9)このことは位置する活動と位置されたものが、厳密に区別されねばならないことを意味している。何物もそれ自身を位置させることはできない。秩序ある空間は、それが秩序を与える要素から絶対的に独立していなければならない。

10)それらは曖昧な境界を持っている（つまり「曖昧な一体である」）かもしれないが、明瞭に定めることができるものである。

11)しかしもちろんそれはいくつかの雑誌が最近解釈したように、自動的に共産主義者やマルクス主義者ユートピアの崩壊を意味するわけではない。例えばスイスの雑誌 Whchenzeitung1991 年 7 月 12 日号の見出し、「ユートピアに従う生活」を参照せよ。そのユートピアの終焉について議論は、A．グロス（Gross(1991)、107 頁）によって説明されたように、そこには変化の要求も、変化に対する耐久力もないことを暗示する。

12)「境界にて」（Reichert(1992)）において、私は位相－論理学と、哲学におけるその中心的役割についてさらに詳しく説明した。

13)プラトンは彼の世界—秩序において、存在の三つの基本的形式を区別した。つまり思考されることができ、永久に形の変らない「理念的」形式、目に見え、生成し、過ぎ去ってゆく「複製的」形式、そして三番目に、彼の言葉にしたがえば母親のように生成するものすべてを包む「理解しにくく謎のような」形式。それは知覚されず「ある種の非論理的な理性」によってのみ理解され、「おそらく実体はなく—すべての存在は必然的になんらかの場所にあり場所を占有せねばならないが—われわれが夢の中に見るような、天国にも地上にも存在しないものなのである。真理と関係し、自然の事実性を呼び覚ます同じようなこれらの、そして他の事物について、われわれは夢のような感覚しか持たず、それらが真実かどうかも決定し得ない。
（Plato(1959)）「ティマイオス」、第 8 章、52b。

14)ジグリート＝ヴァイゲル（Weigel(1990)、10-11 頁）によって提案されたように。しかし私はそれを彼女の不的確な表現であると考える。なぜなら彼女は他の場所では「女性の二重の場所」の問題(261 頁)について書いているためである。一方で彼女は定められず、あいまいでなく、流れるような「女性」のどんな特徴も拒否している。それゆえ私は、それにもかかわらずなぜ彼女のなかで食い違いが生じないのか疑問に思う。

15) Sigrid Weigel(1990)269 頁を参照せよ。

16)イリガライはそのような関係においてアイデンティティを定める女性を、女性であって女性ではないもの、同時に

他のジェンダーであり不可能なジェンダーである「非女性」とよんだ（例えばIrigaray(1977)、112頁）。

17)この表象関係の知的でとても楽しい説明は、イリガライによって、『反射鏡』という著書の最初の章においてなされた。そこで彼女は女性のセクシャリティと女児の成長についてのフロイト学派理論を－実際とても公正なやり方で－解体し、それらが男性のセクシャリティの標準と働き、そして男児の成長にどの程度依拠しているかを示した。例えばフロイトにとって、女性になることは主に「自分の男根の欠如」を認識し受入れることにあるのではないかと主張しつつ、イリガライは「人間マイナス男性として自分自身を（表）現する能力イコール標準的な女性」と結論づけている（Irigaray(1980)、30頁）。

18)エヴァ＝マイヤーは、彼女の著書『計算と物語』において、古典的な論理学のアイデンティティ（アイデンティティを持つ主体）の向こう側とこちら側において同時進行する活動としての言語と書くことの可能性を説明した。彼女はギュンター（Günher(1980)）が、つまり内省することができる存在である自己の創造は、それから演繹される第二の他者を必要とするという、創造の異なった神話において示したジェンダー関係を説明している（Meyer(1983)、43頁以下と83頁以下）。

19)ジュリア＝クリステヴァは「『主体』は、記号が支配する記号論的実践に隠された平行する多様性を、記号に従属し続けている『二次的な』—もしくは『周縁的な』現象（夢、叙情詩、狂気）に自らを譲与することによって補う記号を思考することにおいてのみ存在する」と書いている（『記号論：記号分析の研究（semiotike. Reicherches pour une semanalyse）』、274頁、E．マイヤーの翻訳による。Meyer(1983)、66頁）。

20)「主人—下男：性的服従の幻想」（Benjamin(1989)）という論文はどのように現在の支配的な「合理性」の理念が、現在の支配的なセクシャリティの形態と同じあり方で、二元論的な主体－客体関係の構造によって特徴づけられているかを説明した。どちらの場合も相互の暴力という結果を招く。なぜならばそのような関係は、それぞれ個々の人間における開放性と閉鎖性、依存性と自律性の活気に満ちた相互作用を許さないからである。それはあらかじめ決められ、固定された配分のもとに、異なった人間の間のみにそのような相互作用を許すのである。サド－マゾ関係において極端にあらわれるが、より「正常な」関係にも保たれていると、ベンヤミンがその論理を説明する暴力は、このようなあらかじめ定められた役割から解き放たれようと試みる中で生じるのである。

21)この点について、テオドール＝アドルノが他のコンテクストにおいて論じるなかで、「ユートピア」は彼にとって、「犠牲なき主体の非アイデンティティ」にあると書いていることに注目することは興味深い（Adorno(1984)、277頁）。

22)イリガライの論文「重なり合う商品(Waren untereinander)」（Irigaray(1977)、109-204頁と31頁以下）を参照せよ。そこで彼女は男性の、他の男性への欲望（模倣の欲望）に基づいた交換関係として経済を描いている。そして異性愛はこの経済における役割の割り当てなのである。つまり「男性」は交換する主体であり、「女性」は商品、男性と彼らにとっての使用価値との間の交換価値を持った客体なのである。

23)ジル＝ドゥルーズ、クリステヴァの引用（Kristeva(1978)、11頁）による。

24)ベンヤミン（Benjamin(1990)、220頁）は、客体関係に関する理論の、現代における代表者を概観している。

25)私はクリステヴァ（Kristeva(1978)）とラカン（Lacan(1986,1987)）を、この概略的な記述の基礎においているが、しかしながら、彼らの正確な用語法を用いてはいない。

26)この記述はフロイトの『夢判断』における無意識の初期過程(Primärvourgänge)に関するかれの一節を参考にしている。そこで彼は「...それまでは辻褄の合ったあり方で構築されていた夢思想が夢作業の中に引き入れられる過程」について述べ、それらを以下のように記述している。

(1)個々の表象が保有している強度は、そっくりそのまま放出されうるものであり、一表象から他表象へ移行し、その結果、個々の大きな強度を持たされた表象が形成される（圧縮もしくは濃縮）。

(2)...圧縮の目的のために、中間表象、いわば妥協的産物が形成される。...前意識的思想を言葉で表現しようとする場合には、非常にしばしば混合形成物、妥協形成物が現われる。これらは「言いちがえ」の諸種類としてあげることができる。

(3)互いに各々の強度を転移し合う諸表象は、互いにもっともゆるやかな諸関係のうちに立っており、われわれの思考がそれを小馬鹿にするような、洒落でもいおうという時にだけ利用されるような種類の連想によって結びあわされている（ことに語呂〔同音〕連想や同義語連想）。

(4)相互に矛盾する思想は、相互に廃棄し合おうと努力することなく、逆に並存し、しばしばそこには何の矛盾もないかのごとくに相寄って圧縮産物を作り出すか、あるいは、われわれがわれわれの思考に対しては絶対に許さないが、しかしわれわれの行為に対してはしばしば許容するところの妥協を形成するかする。（Freud(1976)、753頁、訳は高橋義孝訳(1968)『フロイト著作集第二巻—夢判断—』、人文書院、487-489頁による）。

27)特にチョドロウ（Chodorow(1986)）の命題を参照せよ。

28)ラカンに対するフェミニストの批判もまたこの点から始まっている。例えばイリガライ（Irigaray(1977)、121頁）を参照せよ。

29)マイヤー（Meyer(1983)、42頁）を参照せよ。

30)クリステヴァは近代的主体と、それにもとづいている社会の言語を話さないのが女性であるならば、おそらくそれは

ただの偶然ではないことを以下のように述べている。

直接的かつ普遍的で、非凡なる欲望に無関係な喜びの中にとどまっているために、女性は社会の同質性における否定を表現し、永久に「共同体における反語」なのである。それは彼女が楽しみ事に関わっていることを意味し（直接的かつ普遍的）、それが彼女自身を身体から区別し（非凡な、欲望と快楽の場所）、それによって彼女は身体の楽しみのみがあることを良く知っている（非凡な）。それとも言い換えれば彼女の知識は楽しみ事の知識であり（直接的かつ普遍的）、快楽原理を超えている（身体の快楽、そしてそれはままならない）。したがって彼女の問題は死の恐怖ではなくーなぜならば彼女は去勢されるものをなにも持たないからーどのようにこの楽しみを、それが価値や客体に変わってしまう前に、つまりそれが止まってしまう前に、楽しみや楽しみの不在以上のものとして維持するかということである。（『物質、意味、弁証法(Matiäre, sens dialectique)』Ｅ．マイヤーの翻訳による（Meyer(1983)、41 頁）

31)『神と女性の楽しみ(Gott und das Genießen der Frau)』においてジャック＝ラカンは「彼女のための、存在せず何も意味しない、この彼女のための楽しみがある。彼女がそれを感じている—そして、彼女はそれを知っている—事実のほかには、彼女自身おそらく何も知らない楽しみがある（(1989)、81 頁）。

32)クリステヴァ（(1978)、27 頁）。不在と不在性の区別はこの著書の中でも強調されている。ジュリア＝クリステヴァとエヴァ＝マイヤーは女性を「ゼロ論理的主体」、「誰でもないゼロ主体」とよぶ。「なぜなら自らを記号に従属させない慣習の内に、ゼロ主体は自らを消滅させるからである。（Meyer(1983)、66 頁）

33)Ｆ．ニーチェ、『華やかな知恵』、第 60 章、20 頁以下。

34) *Tractatus* における意味深い主張に関するウィトゲンシュタインの定義を参照せよ。

35)イリガライ（Irigaray(1977)、225 頁）。

文献

Acker, C. (1990): *In Memoriam to Identity*. Grove Weidenfeld, New York.

Adorno, T. (1984): *Negative Dialektik*. Suhrkamp, Frankfurt.

Bacon, F. (1982): *New Atlantis*. Reclam, Stuttgart.

Benhabib, S. (1986): *Critique, Norm and Utopia: a study of the foundations of critical theory*. Columbia Univercity Press, New York.

Benjamin, J. (1986): Herrschaft-Knechtschaft. Die Phantasia von der erotischen Unterwerfung. E. List & H. Studer (eds.) *Denkverhältnisse*, pp. 511-538. Suhrkamp, Frankfurt.

Benjamin, J. (1990): *Die Fesseln der Liebe*. Stroemfeld / Roter Stern, Basel.

Berneri, M.L. (1982): *Reise durch Utopia*. Kramer, Berlin.

Bloch, E. (1982): *Das Prinzip Hoffnung, Bd. 1-3*. Suhrkamp, Frankfurt.

Borch-Jacobson, M. (1991): *Lakan. The Absolute Master*. Stanford Univercity Press, Stanford, CA.

Chodorow, N. (1986): *Das Erbe der Mütter*. Verlag Frauenoffensive, München.

Curry, M. (1985): After Nuclear War: possible world and the cult of expertise. Preliminary manuscript from the author.

Derrida, J. (1979): *Spurs / Eperons*. Universitiy of Chicago Press, Chicago, IL.

Deuber-Mankowsky, A. (1991): Weibliche Interesse an Moral und Erkenntnis. H. Nagl-Docekal & h. Pauer-Studer (eds.) *Denken der Geschlechterdifferenz*, pp. 3-12. Wiener Frauenverlag, Wien.

Foucault, M. (1967): Andere Räume. K. Barck (ed.) *Atithesis*, pp. 34-46. Reclam, Leipzig.

Frank, M., Raulet, G. & Van Reijen, W. (1988): *Die Frage nack dem Subjekt*. Suhrakamp, Frankfurt.

Freud, S. (1976): *Interpretation of Dreams*. Penguin, London.

Gearhart, S. (1982): *Das Wanderland*. Verlag Frauenoffensive, Wien.

Gilman, C. Perkins (1979): *Herland*. Random House, New York.

Goodey, B. (1970): Mapping Utopia, *Geographical Review*, 60, pp. 15-30.

Gross, A. (1991): Über das Geschäft mit der unechten Zukunft. M. Heller & W.Keller (Eds.) *Werbung ist für alle da*, pp. 106-116. Museum für Gestaltung, Zürich.

Günther, G. (1980): *Beiträge zu einer operationsfähigen Dealektik, Bd. 3*. Meiner, Hamburg.

Hrachovec, H (1980): *Vorbei, Heidegger, Frege, Wittgenstein. Vier Versuche*. Stromfeld / Roter Stern, Basel.

Irigaray, L. (1977): *Das Geschlecht das nicht ein ist*. Merve, Berlin.

Irigaray, L. (1980): *Speculum. Spiegel des anderen Geschlechts*. Suhrkamp, Frankfurt.

Irigaray, L. (1987): Eine andere Kunst des Geniessens. L. Irigaray (Ed.) *Zur Geschlechterdifferenz*, pp. 17-42. Wiener Frauenverlag, Wien.

Jameson, F. (1986): Postmoderne. Zur Logik der Kultur im Spätkapitalismus. A. Huyssen & K. Scherpe (Eds) *Post-*

moderne, pp. 45-102. Rowohlt, Reinbek.

Jelinek, E. (1990): Das vampirische Zwischenleben, *Die Tapeszeitung*, Berlin 9 May 1993, pp. 15 ff.

Kosseleck, R. (1982): Die Verzeitlichung der Utopie. W. Vosskamp (Ed.) *Utopieforschung*, Bd. 3, pp. 1-14. Metzler, Stuttgart.

Kristeva, J. (1978): *Die Revolution der poetischen Sprache*. Suhrkamp Frankfurt.

Lacan, J. (1976): *Encore (Seminar XX)*. Quadriga, Berlin.

Lacan, J. (1987): *Die 4 Grundbegriffe der Psychoanalyse (Seminar XI)*. Quadriga, Berlin.

Lechte, J. (1990): *J. Kristeva*. Routledge, London.

Mauss, M. (1989): Der Begriff der Person und des Ich.. M. Mauss (Ed.) *Soziologie und Anthropologie*, Vol 2 pp. 221-252. Fischer, Frankfurt.

Merchant, C. (1987): *Der Tod der Natur*. Beck, Munchen.

Meyer, E. (1983): *Zählen und Erzählen. Für eine Semiotik des Weiblichen*. Medusa, Wien.

Meyer, E. (1990): *Der Unterschied, der eine Umgebung schafft: Kybernetik, Psychoanalyse, Feminismus*. Turia u. Kant, Wien.

Moi, T. (1986): *The Kristeva Reader*. Basil Blackwell, Oxford.

More, T. (1989): *Utopia*. G. Logan & R. Adams (Eds) Cambridge University Press, Cambridge.

Moriis, W. (1962): *News form Nowhere*. Penguin, London.

Nicholson, L. (1990): *Feminism / Postmodernism*. Routledge, New York.

Nietzche, F. (1988): *Fröhliche Wissenschaft, Krit. Studienausgabe*, Bd. 3. dtv/de Gruyter, München.

Piercy, M. (1979): *Women at the Edge of Time*. Woman's Press, London.

Plato, N. (1959): *Kritias Sämtliche Werke*, Bd. 5. Rowohlt, Hamburg.

Plato. N. (1959) *Timaios Sämtliche Werke*, Bd. 5. Rowohlt, Hamburg.

Reichert, D. (1992): On boundaries, *Society and Space*, 10, pp. 87-98.

Riley, D. (1988) *Am I that Name? Feminism and the Category of 'Women' in Hitory*. University of Minnesota Press, Minneapolis, MN.

Rose, H. (1988): Dreaming the future, *Hypatia*, 1 pp, 119-138.

Russ, J. (1985): *The Female Man*. Woman's Press, London.

Schwenk, T. (1988): *Das sensible Chaos*. Verlag Freies Geistesleben, Stuttgart.

Spencer Brown, G. (1969): *The Laws of Form*. Allen & Unwin, London.

Varela, F. (1975): A calculus for self-reference, *International Journal of General Systems*, 2, pp. 2-24.

Von Braun, C. (1989): Die schamlose Schönheit des Vergangenen. Verlag Neue Kritik, Frankfurt.Vosskamp, W. (1982): Utopieforschung, 3 Bd.. Metler, Stuttgart.

Weigel, S. (1990): Topolgraphien der Geschlechter. Rowohlt, Reinbek.

Wells, H.G. (1987): *Men Like Gods*. Penguin, London.

Wittgenstein, L. (1982): *Tractatus Logico Philosophicus*. Suhrkamp, Frankfurt.

Woolf, V. (1931): *The Waves*. Hogarth Press, London.

Zohrer-Ernst, U. (1989): Von der Sinnenfeindlichkeit utopicher Modelle. A. Deuber-Hankowsky (Ed.) *Die Revolution hat nicht stattgefunden*, pp. 187-198. Diskord, Tübingen.